

選考委員のことば

ミュージアムのホームページをめぐる

佐野 みどり



私の専門は日本美術史ですが、勤務校で学芸員資格取得のための科目、視聴覚メディア論も受け持っています。この授業は、ミュージアムの学芸員としての、視聴覚メディア利用の問題点やあるべき姿、可能性などを実践的に学ぶものです。私はこの授業で先日、次のような課題を出しました。

＜美術館・博物館のホームページの一例を挙げて、その内容や問題を論ずること＞

すると、受講生 120 名ほどが力のこもったホームページレポートを提出してくれました。この課題は彼らの好奇心に火をつけたようです。ミュージアムという場が抱える今日的な問題、あるいはインターネットの功罪、文化発信の場としてのミュージアムの可能性などが鋭く論じられていました。簡単にレポートの全体像を眺めてみましょう。まず、彼らはどのような視点（契機）で、ミュージアムのホームページを選んだでしょう。①は地縁です。住まいの近くにどのようなミュージアムがあるのか、あるいは郷里などそこにあるのを知ってはいるがまだ行ったことはないミュージアムが、どのような内容なのかを知りたいと行った、もっぱら地域社会のまなざしからのアプローチ。そして②は、名前。有名なミュージアムもしくは有名な作品に惹かれて、ホームページを覗いてみようという動機。たとえばルーブル美術館のモナリザを見てみたい、という具体的な好奇心です。それに対して③は、よく知っている（しばしば通っている）好きな美術館・博物館がいったいどのようなホームページを動かしているのかという、確認というタイプもあります。そして④は事項。自分が興味を持っている、たとえば、おもちゃやぐい呑み、土人形から食玩フィギュアなどさまざまな

生活文化の造形物から、野球選手や歌手、映画スターなど有名人、郷土芸能や動物、はては虹や風まで、さまざまです。

二つ以上のホームページを比較して論ずる受講生もいましたから、今回とりあげられたミュージアムは、200余館を数えましたが、＜良かった＞と評されたホームページはどのような理由からだったでしょう。それらは、まず

- 1) 検索システムの充実
- 2) コンテンツの充実
- 3) 利用性

といった面を挙げています。たとえば、横浜美術館のホームページは少なからぬ人がとても高い評価で語っていますが、それはここの検索機能がとても優れており、他の機関へのリンクも多く、行き届いた情報の発信が考慮されているからです。京都国立博物館やルーブル美術館も評価が高いホームページでした。「所蔵作品の情報がホームページ上に出し惜しみされていない」といった文言もありました。総じて、美術館のホームページに対しては、作品の画像情報への期待が高く、質と量の面で満足度の高い情報開示を求めているようです。そして、それらの画像を手軽にダウンロードできるように設定されていることも評価点になっているようです。その一方で、「ホームページ上で、こんなに作品を楽しんでしまうと、美術館自体に足を運ばなくなるのでは」といった危惧も指摘されています。たとえば、

- 4) 双方向性

の面で、特に注目されていたヴァーチャルミュージアム。先に挙げたルーブル美術館や大英博物館は、とても充実したヴァーチャルミュージアムを動かし

ています。なかでも、ルーブル美術館は、資生堂のメセナ事業で日本語版があることも、利用しやすさとして高く評価されたホームページですが、「もっと見たい」「実際に体験してみたい」という意見と「行きたくても行けない遠隔地のミュージアムを楽しむことができた」「ヴァーチャルで十分満足できた」といった意見は、ほぼ同数でした。

双方向性といった点で、掲示板で学芸員と訪問者の交流が活発なホームページや掲示板を一種のワークショップの場として機能させ、ホームページ上の展覧会を構成しているホームページなど、インターネットの有効性を感じさせる評価点も、これからのミュージアム活動を考える上で心に残りました。ミュージアムショップのオンライン購入の利用しやすさなども、要望が多かった事項です。

では、問題点としては、どのようなことが挙げられていたでしょう。上記の評価項目が十分に達成されていないなどの他、

- 1) 子供や老人への配慮 (→誰を対象とする内容なのか?)
 - 2) メンテナンス (→何時の情報なのか?)
 - 3) 操作性 (→重過ぎる、サイトマップがない、どこを見たらよいのかわかりにくい)
 - 4) デザイン (→美術館なのにダサイ)
 - 5) 情報量の多寡 (→文字情報が多すぎる)
- といった項目が論じられていました。5) の情報量の多寡といった面では、文字情報が多すぎると否定的に眺められていることを知り、改めてミュージア

ムのホームページに人々は何を求めているのかを考えることとなりました。これらの問題点の中で、私は特に第一の項目が気になります。インターネットは、もはや若者だけに占有された場ではありません。次代を担う子供たちへの発信が重要な案件であることは、優れた教育プログラムを提供しているミュージアムが少なからずあることをもって、安心していてもいいのですが (もちろん、まだまだ十分ではありませんが)、老人や障害をかかえる人々への配慮の必要性は、いまだ十分には認知されていないように思われます。たとえば、ミュージアムのホームページで、視覚障害者に向けた聴覚ボタンが設定されているものを私は知りません。ミュージアムのホームページは、自館の広報としての機能だけではなく、より広い社会的機能を担っているのです。総じて、現行のホームページは<これまで>タイプが多く感じましたが、魅力的なくこれから>タイプが次々と活動しはじめてほしいと思います。

最後に、異色のホームページを紹介しましょう。それは Web 上にだけ存在する博物館、富松城歴史博物館のホームページです。([http : //tomatsujyou.com](http://tomatsujyou.com))、これは、尼崎市富松町の「富松城跡を活かすまちづくり委員会」がつくっているヴァーチャルミュージアムですが、<神戸大学の「地域連携センター」と「ご来館の皆様」とともに双方向で学びあい成長させていく>という、<これから>を楽しみにしたいと思います。

(学習院大学教授)